

米語研究の文献

石 田 英 二

〔摘要〕 主として研究文献より見たる米語研究の發達略史。米語と英語との相違に關する認識の發生より、更に進んで米語を英語と區別し、一の獨立せる國語として取扱わんとする傾向の發展、及びそれに貢獻せる人々の業績に就いて。

ここに云うアメリカ語とはアメリカ合衆國に於て一般に用いられている英語が、合衆國の獨立國家としての發展につれて次第に一國語としての性格を帯びるに至つたものを指すのであつて、所謂 *American Language, American English, Americanisms, American*, 等と呼ばれているものを意味する。このアメリカ語なるものゝ定義を下し、範疇を定めることは、從來多くの學者の試みて來たところであつて、諸家の説を檢討するだけでも多くの紙面を要するから、今こゝでは最も簡單でしかも要領を得た *NED* の定義を用いておく。即ち “*A word or phrase peculiar to, or extending from, the United States.*” (合衆國獨特の、又は合衆國を源とする、語又は句)である。此の論文では主としてアメリカ語研究の文献に就いて論じるつもりであるが、特に發音のみを取扱つてゐるもの、及び英米以外の研究文献に就いては省略することを一言御斷りしておく。

又、アメリカで用いられている英語を、*American Language* と呼ぶか *American English* と稱するかに就いても、アメリカ語そのものに對する諸家の態度次第で、説が區々であるが、ここでは米語研究家として、又批評家として有名な *H. L. Mencken* に従つて、假にアメリカ語を云う言葉を使つておく。この名稱の是非に就いても論ずれば相當長くなると思うから、ここではこの問題にふれることを避けて、當面の問題、即ちアメリカ語の發達に話を進めよう。

先ずアメリカ語と云うものが、どうして出來たか？ 云うまでもなく、英國人がアメリカへ移住して來た時に持つて來た英語に、アメリカ印

度人や、英國以外の國々からの植民、の言語が混入し、更に環境の必要に應じて、その英語が種々の變化發達を遂げて現在のようなアメリカ語を生じたのである。従つてアメリカ語に於ける「英語以外の要素」の研究は、アメリカ史そのものと關係して興味のある題目となり得る。又一方アメリカ独自の環境に應ずる必要から來た新語の發生、英語に於ける古い意味用法の保存や復活、英語方言の一般化、等も、アメリカ語成立上の特色の一つとして研究上重要である。併し、こゝでは此等の問題に立入らないで、アメリカ語の存在が、何時頃から、どう云う人々によつて認められ、それ等の人々が、アメリカ語と云う新たな現象に對して、どう云う態度をとり、如何なる業績を残しているかを、主として検討して行く豫定である。従つて現在よく論ぜられるアメリカ語の發音とか、英語との話法上の相違、單語の意味用法に於ける英米の差違、などと云うことにはふれないで、純粹に文獻的研究を進めて行くこととする。先ず末尾の文獻表を参照して頂きたい。此はアメリカ語の研究が始まつて以來の主要な文獻の表であつて、十八世紀に屬するものが二種類、十九世紀前半に十種類、十九世紀後半に五種類、そして廿世紀に入つてから二十一種類。これで大體主要なものは網羅したつもりである。勿論廿世紀に入つてからの研究が最も注目するに足るのであるが、アメリカ語發達史の上からは、それ以前の研究と雖も見落すべきではなく、殊に此の表にあるものなどは何れも代表的な重要なものである。この表に基いてこれからアメリカ語研究の歴史を略述して見よう。

本來ならば一六〇七年及び一六二〇年に於ける英國人の最初の植民のことから、否、それよりもコロムブスのアメリカ發見のことから説き進めなくてはならないのであるが、あまりに長くなるからこれは省略して、本論に直接關係する點から話を始める。

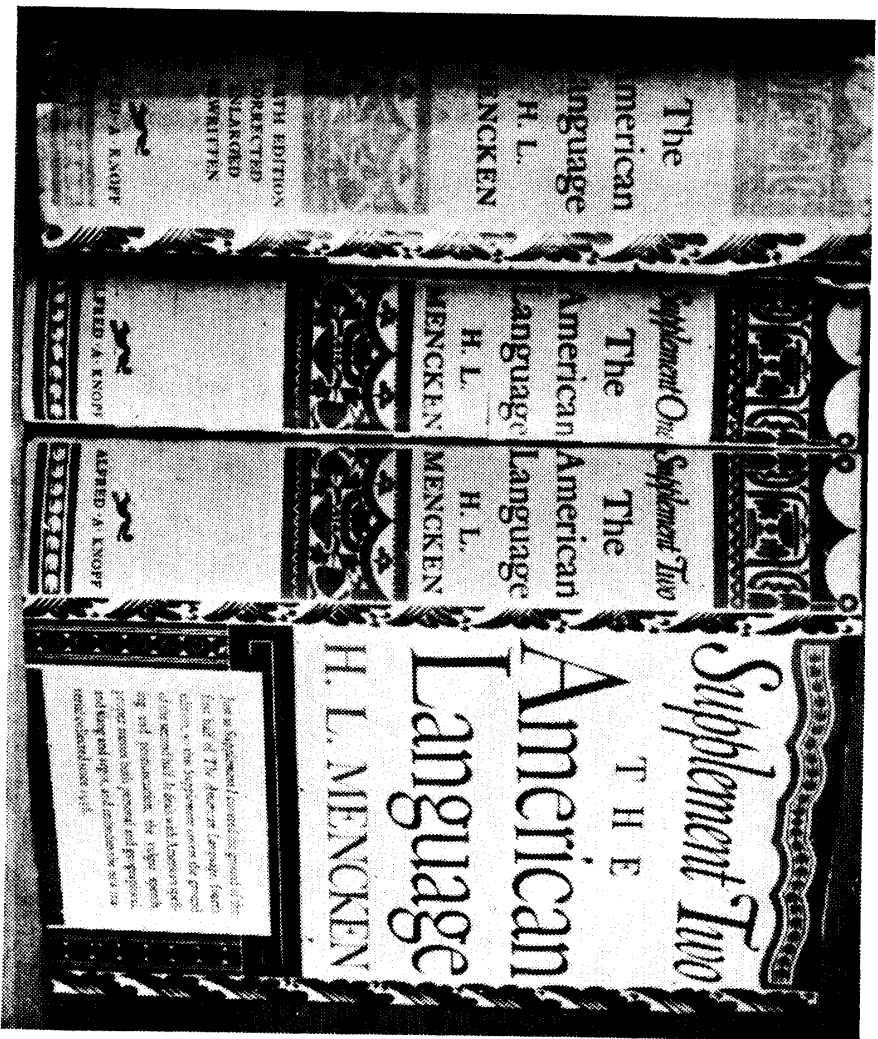
英國人がアメリカと云う新大陸へ移住した時、其處の生活が本國の生活と甚しく異つていたことは云うまでもない。第一、本國にない色々のものがある。又、新しい環境に順應する爲には、本國の生活と異つた種々の生活様式をとらなくてはならぬ。勢い今迄用いていた語彙だけでは不便であり、新語を用いなくてはならない。そこで或はアメリカ印度人の言葉を採入れたり、自分等の間で新しい言葉を作つたりした。英國人よりも前に植民していたスペイン人、又、英國人と前後して植民したフランス人、オランダ人などの言語もとり入れられた。その系統の言葉が現在のアメリカ語を構成する要素の一つとして今でも残つてゐる。このようにして語彙が増したのみならず、英本國では使用されなくなつてしまつた言葉や方言の類が、アメリカでは生命力を維持して現在に至る、と云うような現象も起つた。こうして次第にアメリカ語が、アメリカ語獨特のものを持ち始める一方、政治的には一七七五年から八一年の American Revolution 等によつて、一國家一國民としての獨立意識が強ま

ると、勢いそこに言語的にも獨立の氣勢が上り、有名な Webster の辭書は實に *An American Dictionary of the English Language* (1828) と銘打つて、「アメリカ人の」辭書たることを標榜したのみならず、内容に於てもそれに相應しい種々の改良を試みたのであつた。Webster の業績がアメリカ語獨立の機運を促進したことは大なるものがある。アメリカの發展につれ、アメリカ人獨特の國民的氣質も發達して、それが英國人の氣質と大に異なるものであることは周知の事實である。この氣質も亦アメリカ語の獨特な發達成長に影響し、その一面が、殊に現代では、俗語卑語の盛な發生と云う現象となつて現れている。

前置きはこの位にして、別表に目を移そう。一々の項目に就いて詳説するとあまり長くなるから、それは次の機會にゆずつて、こゝでは全體を概観するに止める。以下は表を参照しながら讀んで頂きたい。

文献表の最初に Witherspoon と云う人の名を出したのは、これが年代的に云つても最も古いのみならず、Americanism と云う言葉を始めたのが實に此の人だからである。Princeton 大學(當時の College of New Jersey)の總長であつた彼はスコットランドから來た牧師であり、彼が發表した論文「The Druid」の中でアメリカ風の英語を攻撃しているが、多少なりとも組織立つてアメリカ語のことが、相當の教養ある人によつて論じられたのはこれが最初であらうと思われる。此の論文の反響として二つの手紙があるけれども、此處に取立てて論ずる程重要なものではない。それよりも第二代目の大統領となつた John Adams がアメリカ語の將來性を認め、その健全な發達の爲に學會の設立を提唱した二通の手紙の方が、文献としては價值があるであらう。

併し以上は何と云つても未だアメリカ語に對する關心の僅に現れ始めたことを示すのみであつて、次に述べる Webster の業績、殊にその辭書編纂の偉業は、アメリカ語の性格を確立する上に重要な働きをしたものである。即ち、從來は一七五五年に出た Dr. Johnson の辭書が標準となり、こと英語に關する限り Dr. Johnson の權威が絶對的なものであつたのに對し、Webster の辭書は、その所謂 Webster 式改良綴字の採用、Johnson の辭書には無かつた五千餘の言葉の採録等の點で、アメリカ語發達の機運を促進し、「英語と米語との相違」と云う idea を強調したことは見逃せない。併し、Webster の辭書がアメリカ風を多分に採入れ、アメリカ語の standard を樹立したとは云え、これは矢張あくまでも一般的な辭典であつて、特に Americanism だけを集めたものではなかつた。特に米語のみを集めた glossary の最初のものには David Humphreys が自作の劇に附けたもので約二七五の語句を集めている。けれどもこれは獨立した書物でもなく、又そのすぐ翌年に



Mencken の “American Language”
 第四版とその補遺第一巻及び第二巻。

VOCABULARY.

OR
COLLECTION OF WORDS AND PHRASES
 WHICH HAVE BEEN NEGLECTED TO BE COLLECTED
 TO THE
 UNITED STATES OF AMERICA,
 BY JOHN PICKERING,
 AN ESSAY
 ON THE
 PRESENT STATE OF THE ENGLISH LANGUAGE
 IN THE
 UNITED STATES.

ORIGINALLY PUBLISHED IN THE MEMOIRS OF THE AMERICAN ACADEMY OF ARTS AND SCIENCES; AND NOW REPRINTED WITH CORRECTIONS AND ADDITIONS.

BY JOHN PICKERING.

AT THE OFFICE OF LEVERING, CORNHILL, TOWNSEND'S DOOR, BY LIVING STREET, NEW-YORK.

PRINTED BY COLWICK AND WELLS, No. 1 CORNHILL.

*****PICKERING AND WELLS, No. 1 CORNHILL, N. Y. 1816.

「Pickering の米語辭彙」の扉

Pickering の Vocabulary が現れた爲、それに壓倒された形であつて、アメリカ語を特に詳しく研究する人々以外には知られていない。普通アメリカ語を辭典風に集めた最初のものとしては、Pickering の Vocabulary (寫眞参照) が考えられる。

これは約五百の所謂アメリカ語と考えられるものを Alphabet 順に並べ、卷頭に相當長い序文を附けたものであつて、その序文はアメリカ語研究上、最も古い文献の一つとして珍重さるべきものである。大學教授の地位を二度迄提供された(尤も彼は辭退して受けなかつたが)程の學識ある著者がアメリカ風の英語に對して、當時これ程の關心を有したと云うことは、假令その態度がアメリカ語に對して全面的に賛成でなかつたとは云え、アメリカ語の將來性が當時既に一部の識者の間に認められていたことを示すものとして注目すべき事實である。Webster も此の Vocabulary に就いて Pickering に手紙を書いており、また Theodoric R. Beck が學會でこの Vocabulary に就いてなした講演は Albany Institute の會報に印刷されて、アメリカ語研究史上の一文献となつてゐる。

扱て、アメリカ建國の歴史に遡つて考えると、最初の植民團が南部 Virginia 州 Jamestown に上陸したのが一六〇七年の初めであり、一方北部 New England の Massachusetts 州 Plymouth に Puritans の上陸したのが一六二〇年末のことであるから、南部の方が北部よりも早く植民されたこととなる。従つてアメリカ語の歴史も、南部の方が早く始まる譯であるが、北部と南部との記録文書を比較すると、Virginia 植民地の記録文書で、保存されている古いものは、アメリカに一時滞在の英國人によつて書かれるか、でなければ、標準英語を離れた變則英語を避けるだけの十分な知識をもつた人々によつて記されている爲に、所謂アメリカ語の研究資料としての價値に乏しく、北部 New England 地方の記録の方が役に立つのである。それで今迄論じて來たのはすべてこの北部のアメリカ語を中心としてゐるのであるが、此處で目を轉じて、南部地方のアメリカ語に關する研究を考察して見よう。

南部地方のアメリカ語に注意を拂い、これに就いて書残した最初の人は Mrs. Royall である。この人は一種の女傑であつて、夫の死後、一文無しの状態から、著述と出版とで奮闘し、遂にその時代の最も有名な婦人の一人となつた。自分の發行している新聞の賣上を増す爲に全國を旅行して廻つたが、その時各地で氣の付いた言語上の特色を、その著述の各所で述べてゐる。従つてアメリカ語に關するまとまつた一冊の本として残つてはいないが、それでも矢張り、初期のアメリカ語研究史上 Royall 夫人の名を逸することは出來ない。尤もこれは今も云つたように、まとまつたものではなく、まとまつたものとしては一八二九年 Virginia 大學で發刊された週刊雜誌に三回に亘つて現れた "Americanisms"

と云う論文が最初のものであろう。筆者は Wy と署名してはいるが、Robley Dunglison と云う醫學の教授であると推定される。これは前述の Pickering の “Vocabulary” と同じ様に序文と語彙とから成つており、序文では Pickering のことにもふれ、大體に於て Pickering の “Vocabulary” の中から不要なるものを省き、Pickering の見落しているものを新に採入れた、と云つてはいるが、その語數から云うと Pickering の五百餘に比べて僅に一九三であり、その中 Pickering に含まれておらぬと稱するものは五六に過ぎない。併し語數は少いけれどもこれは中々興味のある文献で、此の中に擧げられている單語には、此の記述を以て最初の例とするものも往々發見される。

南部地方のアメリカ語に關する古い文献としては、此等の他にまだ Rev. Adiel Sherwood が *Gazetteer of the State of Georgia* (1827) の第三版(1837)に附した南部方言の list や一八六九年の *Overland Monthly* に現れた “South-western Slang” と云う論文などが擧げられるであらう。此の筆者は Socrates Hyacinth と云う筆名を使つていて、誰であるか正體は分らない。併し内容から見ても相當に教養あり、言語と云うものに關心を持った人であることだけは分る。題名こそ Slang となつてはいるけれども、實はそればかり取扱つたものではなくて、南西部各州の色々な事柄に就いての方言的特色が取上げられ、好箇の研究資料を提供している。

所謂南部と云うのも西部と云うのも、要するに漠然たる稱呼であつて、判然と地理的に區別もされないし、又言語的にも共通點が多い爲、一口に南西部とか the West と云う言葉で現されることがある。勿論現代の常識から云うと the West はミシシッピ河以西、the South は Mason and Dixon's Line ^(註一)以南の地方を云う譯であるが、此處で云う West とか South とかは frontier line が未だミシシッピ河を越えなかつた頃のそれを云うのである。十九世紀初期の the West と云えば、オハイオ河の南、アリゲニイ山脈の西に當る地域一帯であつて、當時未だ “land beyond the mountains” として一種 romantic な神秘性を多分に有しており、野蠻な Indians や猛獸などにまじつて、勇敢な冒険家の活躍した舞臺と考へられていた。そして Paulding, Bird, Longstreet ^(註二) ^(註三) ^(註四) その他の作家によつて書かれた所謂 frontier novels の scene として西部の生活や人物が、特殊の興味を以て眺められた大きな原因の一は、その地方で話す(又は話すと考えられていた)特殊な言葉であつた。この風變りな方言は一八三〇—四〇年代の作家によつて西部の生活が描かれる時に盛に利用されたものであつて、丁度我國でも山窩の生活を描く小説家が、山窩の言葉を使つて効果を擧げるように、西部小説獨特の雰圍氣を醸し出したものである。一體に廣漠として生活がすべて大規模に出來ている西部に於ては、表現も自然大袈裟となりがちで、所謂 Western tall talk ^(註五) などと云うものも發生し易かつた譯であらう。誇張した表現はアメ

リカ語の一特徴と考えられているが、その発生した原因はこう云う所に基くのではあるまいか。

扱て、もう二〇三〇重要な文献を簡単に一瞥して、此の話の前半を終ることとしよう。“The Last of the Mohicans”その他四篇の所謂“Leatherstocking Tales”の著者として、アメリカ文學史に名を留めている James F. Cooper (1789—1851) が、一八三八年その著書の中で“On Language”と云う論文を書き、アメリカ語に關して興味ある論述をなしていること、又これもアメリカ文學史では“Peter Simple”その他の海洋小説で知られている Maryat ^(註)大佐が、“Diary in America” (1839) 中の“Language”と云う項目で、専らアメリカ語に就いて論じていること、は、何れも研究史上注目し得る事項であるが、それよりも此處ではもつと大きな業績、Bartlett の米語辭書 (1848) に就いて一言しておく。これは從來論じて來たものに比べて遙に大きく、兎も角もアメリカ語専門の Dictionary と呼ばれるに足る最初のものとして重要である。版を重ねること四回、その中第二版でかなり増補し、第四版で更に大に改訂増補したらしい。これは約三七二五の項目を收め、Introduction では、アメリカ語の發生、その地方別、時代別、特徴などに就いて、簡單ではあるけれども要領よく述べている。内容から云つても、これまでに述べて來たもの、何れよりも大きく (八一三頁の大冊)、引例も豊富で、中々興味のある文献である。例えば“Railroad Nomenclature”と云う項目には、鐵道關係の英米語對照表を掲げたり、“Liquor”の項ではアメリカ人が嗜む酒精飲料を列記した上、飲酒家が一日中のどの時間にどんな酒を呑むかと云う時間表まで、雑誌から引用して紹介している。また、“Gerrymandering”と云う語についての挿畫は、此の語の由來の詳細な説明と共に、中々面白いものである。

(註) この畫は Webster の辭典にもあり、語源に就いても Webster を見れば分るが、今では gerrymander と云う單語は英米を通じて、政治用語の一つとして用いられており、特に米語的性質を持つものではない。ただ語源が米國にあるだけである。自黨の利益となるように選挙區を勝手に改變することを云う。メンナンの The American Language, Supplement I, pp. 290—291 に詳しく説明がある。

以上述べて來たものは Socrates Hyacinth のもの以外はすべて十九世紀前半に屬し、大體此の話の前半を構成するものである。これから後半に移つて、十九世紀後半と廿世紀とに現れた主な資料に就いて略述することにしよう。併しこれは十九世紀前半のものに比べると數も多く、且つ重要であつて、今迄のように説明しているとあまり長くなるから、説明を更に簡單にして、専ら別表によつて著者や書名その他を見て頂きたい。又、順序も今迄のように順番に一々取上げないで、重なものだけを論じて行こうと思う。

別表でもわかるように Bartlett 以後、若干アメリカ語の辭書や研究書が現れていて、その何れもが、アメリカ語研究史の上からは見逃すことの出来ないものばかりであるけれども、眞に科學的方法に基いてアメリカ語の辭書を編纂し、アメリカ語の研究と云うものを科學的立場においたのは 1912 年に出た Thornton の American Glossary 二卷である。そして彼は引續き第三卷を出す爲の資料を準備中であつたが果さずして一九二五年に世を去り、その資料は P. W. Long と云う人の手で整理され、Dialect Notes 誌上に一九三一年から少し宛發表され、一九三九年に完結した。つまり一冊の本としては未だ現れていないけれども、印刷の上では第三卷が完成したことになるのである。この第三卷は別として、一九一二年に出た第一卷と第二卷だけでも、A から Z まで一應は完結しているのであつて、語數約三七〇〇、引例は一萬四千に及ぶ豊富なものである。そしてそれが一々年代順に排列され、data が附してあることなどは、當時發刊されつゝあつた NED の編纂法にならつたものとも思われ、從來現れた同種のものの中では一番しつかりした勞作である。更に卷末に附した Appendix には多くの小話や短詩を集めて、アメリカ語用例の見本を示して居り、これも亦、分つてゐるものにはすべて年代と出典とが示されている。最近出た最大のアメリカ語辭書 DAE^(註7) も、この Thornton の辭書に負う所が甚だ多い。彼が此の辭書の中に集めたアメリカ語は、大體次のようなものである。

- (1) 現在英國では廢語や方言になつて了つてゐるが、アメリカでは生きてゐるもの。
- (2) 明かに、アメリカ起原の語句。
- (3) 鳥獸・草木・食物等の名詞で、明かにアメリカ起原のもの。
- (4) 人の名や、或集團の人々の名や、地名。
- (5) 新しい意味を取つた言葉。

以上の他に Thornton は「英國の著作家に於けるよりも早い例を、アメリカの著作家に認めたもの」と云う項を設けているが、但しこれは將來の研究によつて覆されるかも知れぬと云う條件つきである。その時代の新しい slang などを入れなくて、既にアメリカ語として一般に認められてゐるものや、特殊の興味ある言葉で捨てるに忍びないものだけを採つてゐるから、引例の八割以上は半世紀以前の古さを持つたものである、と斷つてある。この辭書がアメリカ語の dictionary として論ずるに足る最初の業績、とまで斷言するのは少し云い過ぎかも知れないが、少くともそれに近いものとして一つの重要な pioneer work であることは、誰しも認めるところであらう。

次にめぼしいものを拾つて行くと、凡そアメリカ語の研究になくはならぬ Mencken の “The American Language” (寫眞参照) がある。初版は一九一九年であるが、現在標準となつてゐるものは一九三六年の改訂第四版であり、それに Supplement の I (1945), II (1948) がある。Supplement (補遺) とは名前だけで、實は立派に獨立した大きな本であり、形の上からは、原著の各章順に、その各章の内容に關して書加えた云う體裁になつてはゐるものゝ、Supplement だけ讀んでも一向差支のないように出來てゐる。大きさから云つても、原著の七六九頁に對して、補遺の第一卷が七三九頁、第二卷が八九〇頁と云う大部なもので、兩卷寄せると補遺の方が原著の倍以上になる。凡そアメリカ語のあらゆる方面に關して、これ程多くの文獻的知識を供給してくれる本は他にない。しかも著者が有名な文筆家である丈に、言語に關する本でありながら、實に興味深く讀めて讀者をして倦ましめない云う長所がある。Mencken は此の大著によつて、今ではアメリカ語研究の大御所のように思われている。そしてこの尨大な三卷の著書を出した後、まだ手許にはアメリカ語に關して書くべき資料が山積し、どんどんその數を増して行くばかりだと云つてゐるが、何分老齡のことでもあり、今後引續きアメリカ語補遺の第三卷を書くことは先ず無いであらうと、自分もその第二卷の序文中で云つてゐる。これはアメリカ語研究家にとつては必讀の書で、著者の態度は、「世界の現狀がこのまゝで進んで行くものとすれば英語よりもアメリカ語の方が盛になるであらう。英國は次第にその植民地などを失いつゝあるが、アメリカはまだこれから榮えて行く見込がある、と云う理由からだけでも、アメリカ語の勢力が強くなるにきまつてゐる。又、アメリカ語の方が英語よりも明瞭であると云う理由からだけでもアメリカ語の方が英語にまさつてゐる」と云うのである。そしてその書物の標題から見ても、大にアメリカ語の自主獨立性を認めていることが分る。この Mencken の態度と反對に、アメリカ語を以て、英語の一方言に過ぎぬとするのが Columbia 大學の G. P. Krapp 教授で、一九二五年に著したその “The English Language in America” 二卷は、メンケンの著書ほど尨大ではないが、極めて學術的な點で定評のある書物である。市河博士が「英語學、研究と文獻」(昭和十一年、三省堂) でかなり詳しく紹介してゐられるから、こゝでは敢て説明を省くけれども、同博士の云はれるように Mencken を讀む人は必ず Krapp をも併せ讀んで、Mencken の補いとすべきであらう。

年代順から云えば次には Mathews が來るけれども (別表参照)、これはアメリカ語一般に關するものではなくてアメリカ語研究の古い文獻に關するものであり、専門の研究家にとつては必讀の書であらうが、一般の讀者にはあまり用のないものである。

一九三四年には American slang の辭書が出てゐる。Mencken はこれを酷評してゐるが、我々にとつては一寸便利なものである。併し

slang の辭書としては恐らく一九四二年に出た Berry and Van den Bark のものが遙にすぐれているであろう。又 slang のように限られた範圍のものでなしに、眞に現代のアメリカ語辭書として權威があり、その方面で NED と比肩し得るものとして、NED と同様の歴史的編纂法に従つた DAE が ^(註7) Oxford 出版部から出たことは、アメリカ語の研究者にとつて何よりの強味である。これは NED 編纂者の一人である Sir William Craigie 及びシカゴ大學の教授 J. R. Hulbert を主任として、その下に多くの有能な學者が協力し、一九二五年から作り始めて一九四四年に完成した一大辭書である。前述の如く Thornton に負う所も大きいが、何分あらゆる面で Thornton の時代とは比べものにならぬほど進んでいる現代に於て、多くの學者の協力によつて成つたものであるだけに Thornton と比較する譯には行かぬ。現代の最も優秀な、且つ最も權威のある米語辭書である。尤も大體に於て一九〇〇年を標準として作られているから、それ以後出來た言葉に就いては、別の參考書に頼らねばならぬ。併しこのように大きなアメリカ語専門の辭書が現れたことだけでも、廿世紀に於けるアメリカ語研究の進歩發達とアメリカ語の重要性とが窺われるのである。一九三九年以來進行中の「合衆國及びカナダ言語地圖」の作製、及び Mencken の新著、と相俟つて、最近に於けるアメリカ語研究上の三大收穫と云えるであろう。なお最近これの廉價版とも云うべき“Dictionary of Americanisms”二巻が Chicago 大學の M. M. Mathews によつて完成された(一九五一年)ことをも附記しておく。

以上、アメリカ語研究初期の文献から始めて、最近に至るまでの諸家の業績を概観し、大體、重要な文献は別表に網羅したつもりであるが、なおこの他に發音に關する研究のみに捧げられた文献があり、更に又、英米人以外の研究家の手に成つたものがあつて、何れもアメリカ語の研究に少なからぬ寄與をしているものと考えられる。更に Dialect Notes 及び American Speech と云う二種類の雑誌は、専らアメリカ語の研究に捧げられてある雑誌で、前者は一八八九年、後者は一九二五年の創刊以來、研究に貢獻する所絶大なるものがある。何分にもアメリカ語そのものが、現在盛に用いられている生きた國語で、刻々に變化生長して行くのであるから、研究の材料は絶えず増大する譯で、その意味から云つても、このような、その時々々の資料を敏速に捉え得る雑誌の存在は、まことに重要且つ有益と云わねばならない。

以上に私は現在私の手で知り得る限りのアメリカ語研究資料の主なものを、表によつて御紹介すると共に、その中の若干のものに關して多少の説明を試みた次第であるが、一口にアメリカ語の研究と云つても、細かく分ければ中々に多種多様の方面があつて、或は發音、或は語彙、或は話法の研究、更に目を轉じて別の方面に向うならば、アメリカ語成立の歴史的研究、アメリカ語とアメリカ國民性、諸外國に於けるアメリカ

語研究、アメリカ語に於ける外來要素の研究、等、いくらでも研究の分野はある。もともと英語から派生して來たものであるだけに、すべての面に於て、英語との關係が主要な部分を占めることは當然である。従つてアメリカ語を研究する爲には先ず十分な英語の知識が必要である。又、現在我國に於てアメリカ語を云々する人々が好んで取上げるような、實用的方面も勿論大切ではあるが、本格的に學問上からする研究も亦忽にすべからざるものである。アメリカ語研究が英語學の一分野として十分に存在の意義を有することは云うまでもないが、これは言語學者、英語學者等、専門家による純學術的研究と、一般大衆の實用的方面からする研究と、兩々相俟つてその完璧を期し得るものであろう。我國に於て、從來兎角等閑に附せられていたアメリカ語の研究が、特にその必要を感ぜられて來た今日、私のこの小論によつて多少なりとも讀者諸賢の關心を惹起することが出来るならば望外の喜びである。

(註) (1) 1763—1767に、英國の天文學者 Charles Mason 及び Jeremiah Dixon によつて設定された線で、Pennsylvania 州南境を劃し、その一部分は、所謂自由州と奴隸州との境界線をなすので有名となつた。

(2) J. K. Paulding (1779—1860). 米國の小説家・政治家。“Westward Ho!” (1832) 等、開拓線生活を描いた物語の作者。

(3) R. M. Bird (1805—54). 米國の劇作家・小説家。

(4) A. B. Longstreet (1790—1870). 米國の著述家。“Georgia Scenes” (1835) の著者。

(5) 西部獨特の誇張した表現。

(6) Frederick Marryat (1792—1848). 英國の海軍大佐・海洋小説家。

(7) Dictionary of American English on Historical Principles (1925—1944). NED の如く歴史的記述方法を用ひて、多くの用例を年代順に擧げてゐる。

(1) John Witherspoon: The Druid (Pennsylvania Journal and Weekly Advertiser, 1781) (2) Letters of John Adams (1774, 1780)

(3) Noah Webster: His Works

(4) David Humphreys: Glossary appended to his drama “The Yankey in England” (1815)

(5) John Pickering: A Vocabulary or Collection of Words and Phrases which have been supposed to be peculiar to the United States of America (1816)

(6) T. R. Beck: Notes on Mr. Pickering's “Vocabulary of Words and Phrases &c.” with preliminary observations (1830) (Transactions of the

- Albany Institute)
- (7) Mrs. Anne Royall: *Her Works*. (1829—30)
- (8) Robley Dunglison: "Americanisms" (*Virginia Literary Museum and Journal of Belles Lettres, Arts, Sciences &c.*" 1829—30)
- (9) Rev. Adiel Sherwood: Glossary appended to the "Gazetteer of Georgia" (1827, 1837)
- (10) J. F. Cooper: "On Language" in his "The American Democrat, &c." (1838)
- (11) Frederick Marryat: "Language" in his "Diary in America" (1839) (12) John R. Bartlett: *Dictionary of Americanisms* (1848)
- (13) (Socrates Hyacinth): "South-western Slang" (*Overland Monthly*, 1869) (14) M. Schele de Vere: *Americanisms* (1872)
- (15) John S. Farmer: *Americanisms Old and New* (1889) (16) James Maitland: *The American Slang Dictionary* (1891)
- (17) Brander Matthews: *Americanisms and Briticisms* (1892)
- (18) Sylvia Clapin: *New Dictionary of Americanisms* (1902) (19) R. H. Thornton: *American Glossary* (1912)
- (20) H. L. Mencken: *The American Language* (1919, '21, '23, '36) (21) G. M. Tucker: *American English* (1921)
- (22) G. P. Krapp: *The English Language in America* (1925) (23) M. M. Mathews: *The Beginnings of American English* (1931)
- (24) M. H. Weseen: *Dictionary of American Slang* (1934) (25) H. W. Horwill: *Dictionary of Modern American Usage* (1935)
- (26) Ramsey and Emberson: *Mark Twain Lexicon* (1938) (27) W. J. Burke: *The Literature of Slang* (1939)
- (28) H. W. Horwill: *Anglo-American Interpreter* (1939) (30) C. C. Fries: *American English Grammar* (1940)
- (29) R. H. Thornton: *American Glossary*, 3rd. Vol. (1939) (*Dialect Notes*) (32) Elbridge Colby: *Army Talk* (1942)
- (31) Berry & Van den Bark: *American Thesaurus of Slang* (1942) (34) Harold Wentworth: *American Dialect Dictionary* (1944)
- (33) *Dictionary of American English* (1938—1944)
- (35) H. L. Mencken: *Supplement One to "The American Language"* (1945)
- (36) H. L. Mencken: *Supplement Two* " " (1948)
- (37) *Linguistic Atlas of the United States and Canada* (1939—) (38) M. M. Mathews: *A Dictionary of Americanisms* (1951)